

福祉にフィットしない方たちの次の選択肢を考えるワーキング

メンバー（敬称略）

座長 丸山 晃	(立教大学 コミュニティ福祉研究所 研究員)
池田 怜生	(社会福祉法人 調布市社会福祉協議会 市民活動支援センター)
押澤 厚志	(社会福祉法人 調布市社会福祉協議会 こころの健康支援センター)
和泉 怜実	(社会福祉法人 調布市社会福祉協議会調布市子ども・若者総合支援事業 ここあ)
矢辺 良子	(調布狛江地区保護司会 理事)
仁田 典子	(NPO法人 調布心身障害児・者親の会)
福田 信介	(社会福祉法人 調布市社会福祉事業団障害者地域生活・就労支援センターちょうふだぞう)

～第1回ワーキング～

日時：令和4年8月8日（月） 14時30分から16時30分

場所：ちょうふだぞう 活動室 参加者：委員 6名 事務局 8名 オブザーバー1名

小テーマ「課題の共有と意見交換」

内容：既存の福祉サービスに合わず、安心できる居場所がない障害のある方を支援している中で感じている課題を共有した。その中でどのような場所があると良いのか意見交換を行い、今後について検討した。

主な意見

- ・福祉にフィットしない方は本人に障害の自己理解がなく、過去の失敗にとらわれているため情報提供しても意欲がない方が多い。
- ・困りごとを共有したり、情報を得たり、体験する場がなく、横のつながりが少ない。
- ・ピアカウンセラーを育成し、もっと活躍する場が増えると良い。
- ・社会参加するにもハードルがかなり高く、社会的孤立につながりやすい。
- ・就労していた方が年を重ねる中でできないことが増え、就労継続ができないこともある。
- ・障害者雇用では長時間勤務を求められるので就労することが難しく、就労継続B型では物足りない人が増えている。短時間労働できるところがあるとマッチする人も多くいる。
- ・特別支援学校を卒業後就労し、すぐに退職してしまう人も多い。そのような人達が自分をゆっくり学び直したり、考えたりすることができる場が欲しい。
- ・保護観察の人は国の仕組みができており、手厚い支援がある。障害のある人も保護司のように身近な存在で支援してくれたり、励ましてくれたりする人がいるとよい。また、職場体験できる場所・仕組みが必要ではないか。
- ・両親の相談先、幼少期から続けて支援してくれるところ、生活の困り感などを気軽に相談できる場所があると良い。
- ・失敗してもリカバリーできる保護的な職業体験が欲しい。
- ・行き場のない人はボランティアを勧められることも多い。しかし、ボランティアは自主性が求められるため、受動的な人にはマッチングが難しい。
- ・ボランティアや誰でもいられる場でも、周囲の方々からの障害特性の理解や共感が不足していると馴染めなくなってしまう。
- ・潜在的なニーズを抱えた、埋もれている人をキャッチできると良い。
- ・多様性を住民が気づき・考えられる場所が必要。
- ・作業や活動をしても、しなくてもよいハードルの低い居場所が必要。
- ・横断的、専門的に相談でき、契約など手続きのいらぬ相談先だと利用しやすいのではないか。
- ・保護司は基本的に月2回面談。未成年は20歳まで、執行猶予の方は猶予が明けるまで、服役後の人は定められた期間が担当となる。
- ・ボランティアではなく、あるがままの自分を認めてもらえる社会体験が必要。

まとめ

失敗してもやり直せる、前向きな社会体験ができる場所が必要だと思われる。また、その体験を今後に生かせる仕組みが重要。支援のあり様も検討していけるとよい。

次回ワーキングでは各委員に事前に記載してもらった「地域資源確認シート」を基に各関係機関の役割の強みと弱みを把握し必要な社会資源を検討する。

また、あがった意見から自己の障害等を振り返りや学ぶ機会や相談ができる窓口、就労の体験ができる場や、何もなくて良い「居場所」が必要ではと共通のキーワードがでてきた。これらの点を中心に課題やニーズを整理していく。

これまでの到達点

第1回ワーキングにおいて、各委員と課題の共有及び意見交換を実施し、共通のキーワードもいくつかでてきた。次回ワーキングでは「地域資源確認シート」を基に、各関係機関の役割の強みと弱みを把握し、必要な社会資源を検討する。

今後の展望と課題

共通のキーワードがいくつか出てきたものの、まだ具体的な展望や課題は見えていない。既存の福祉サービスに合わない方などの現状の把握及び課題確認、整理を行い、支援の方向性を検討する。